



熱戦と交流・再び



巧みに車輪を操る選手たち。前後左右、急回転や急停止など、その技術の高さに圧倒された。

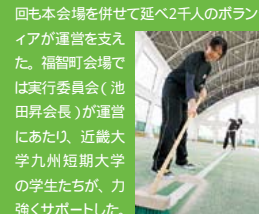


笑顔がこぼれる試合後の握手。緊張した面持ちも一変し、互いのプレーをたたえ合う瞬間。

volunteer



支えるのはボランティア。それが「イツカ方式」と呼ばれる今大会運営の最大の特徴だ。今回も本会場を併せて延べ2千人のボランティアが運営を支えた。



福智町会場では実行委員会（池田昇会長）が運営にあたり、近畿大学九州短期大学の学生たちが、力強くサポートした。



交歓会の入退場は握手とハイタッチが恒例。会場の金田体育館は終始歓迎ムードに。



歓迎ステージの幕開けを飾った伊方小4年生。約800人が集まった会場で、手話を交え「ビリーブ」を合唱した。

熱戦が相次いだ福智町会場。選手たちの素早い動きと力強いストロークに、観客は心を奪われた。



招待した外国人選手に和を感じてもらおうと、太鼓や餅つき体験を企画。振る舞った日本食も大好評。



心が通じれば言葉の壁もなくなる。子どもたちは選手と記念撮影や握手をして交流。海外選手から書いてもらったサインは、思い出とともに、いつしかノートいっぱい。「世界中を回ったけど、これだけ盛大な歓迎は初めて」と選手からも感激のコメントももらった。



場内に車いすのタイヤとラケットの音が響く。福智町屋内競技場では国際Cクラス16試合が行われた。